

九州学園福岡女短大 塩塚 瑞枝

1. 一つの時代の服装は、時代精神の鏡であるとの James Laver の示唆から考えるならば、服装史は衣装形態の時代的特徴の説明に終るものであってはならない筈であり、そのデザインの美を醸成した精神的土壌を掘り起し、その衣装形成の意義を明らかにするものでなければならない。通常、芸術史的にゴシック時代といわれる。13C のイギリス衣装について、その成立過程を追求するのが本議論の目的である。

2. 本研究の具体的資料は出来る限り、当時の彫刻、絵画、写本類及び服飾史書の挿絵を検討し、一般的資料としては服飾史、美術史、一般歴史等による。

3. この時代は極めて宗教的感情の高揚した時期、フランスではノートルダム、ランス、アミアン等の本寺建立、イギリスでもウェルズ、リンカーン等の本寺が建てられ、之等の教会建築には種々の彫刻装飾が見られる。12C 様式のロマネスク的古拙形式から脱皮し、次第に自然主義的傾向をもって人体美表現の傾向が現れる。衣装も又、12C、シャルトル本寺に見られるブリオー様式から、セミタイトのコット様式へ、すっきりした人体美表現への過程を示している。このような変化の解明には、当時のフランス、イギリスの関係を考察、更に 11C 以来十字軍遠征に伴う精神的変動に芽生える人間観の変貌等人間の内部に於ける複合的諸相を探ることによって 13C 衣装の服飾史的意義を明らかにする。